

## 編集後記

2006年の環境科学部、環境科学研究科の活動を紹介する年報第11号をようやくまとめることができました。この間、私たちの地球では、2006年から2007年にかけて北半球の冬は記録的な暖冬を経験しました。また、2007年2月にIPCCの第4次報告者が出され、温室効果ガスの排出などによる人為的な要因による気候変化のリスクが今まで以上に科学的な根拠に基づいて報告されました。またポスト京都議定書に向けた各国の温室効果ガス排出削減への動きも活発になってきました。アル・ゴアの「不都合な真実」も幅広い注目を集めました。1992年の環境サミット以来、環境問題が大きな国際的なテーマとしてなってきたことを実感した1年であったと振るかえることができます。環境科学部、環境科学研究科の教育・研究活動を通じて地球規模の環境問題に資する責任はますます大きなものとなってきました。

さて、第11号では「学生主体の教育活動のとりくみ」を特集のテーマにしました。これからの時代を担う意欲的な学生の取り組みに触発されながら環境科学部、環境科学研究科の教育・研究を発展させる糧になればと考えています。

この1年間に新しく迎えた教員の研究紹介を「私の環境学」で書いていただきました。研究領域の幅が広がってきていることを理解していただけたと思います。

年度末の多忙な時期に原稿を寄せてくださった教員と学生のみなさん、それから原稿集めから編集作業までを手伝ってくださった清水さん、そのほか様々な面で支えてくださったみなさまに編集委員からお礼を申し上げます。